

# 博士学位申請論文

指導教授：韓 景旭

## 中国の「計画生育政策」についての研究 —— “80 後” 世代の婚姻問題を中心として —— 論文要旨

2017（平成 29）年度

西南学院大学大学院

国際文化研究科 国際文化専攻

在籍番号：15DK001

鄭 鷗鳴 (ZHENG Ouming)

## <論文要旨>

本論文は、現代中国の人口政策の変遷、とくに 1979 年から現在に至るまでの中国大陆における「計画生育政策」という人口抑制策について分析を行い、1980 年代生まれの人びとの婚姻問題を中心に、現代中国社会の人口と婚姻問題について、社会学と文化人類学的な調査方法にもとづいて行った調査と研究の成果をまとめたものである。また、彼らの婚姻や家庭に対する考え方、及び価値観の変化を把握し、さらには“80 後”の婚姻にさまざまな困難を来している中国社会の現状について分析を行うのが本論文の狙いである。

筆者は 2011 年から中国の“80 後”の婚姻問題について調査を始め、それと関連する中国の人口政策にも注目してきた。また、人口構造の変化と中国の人口政策の変化により、彼らが直面した婚姻問題と社会問題にも注目した。

20 世紀前半の長い戦争時代を経て、“百廢待興”（万事が荒廢し、復興が期待される）の状況下にあった中国では、20 世紀後半に入ってから、次々に起こる政治運動により、社会と経済の混乱状態が続いた。そして 1970 年代末、鄧小平の「改革開放」路線の指導の下に、国家はようやく運命の転換を迎えることになった。そうした歴史的背景の下に、本論で研究対象になっている“80 後”が生まれてきたのである。

“80 後”は、今世紀初めから話題になっている世代である。彼らに注目が集まると同時に、現代中国の「計画生育政策」が来す社会問題にも注目が集まるようになったのである。同政策の下、1979 年から中国本土における子どもの出産に法規制が加わり、人口抑制の目的はひとまず成功を収めるかたちとなった。しかし、陰では少子化が進行し、「計画生育政策」を巡るさまざまな社会問題がクローズアップされ、今ではその見直しが緊急に求められるようになった。

「計画生育政策」は約 40 年間にわたり、世界で唯一無二の人口抑制政策として、中国の人口構造に大きな変化をもたらし、現代の中国社会と“80 後”だけではなく、中国人の子々孫々にまで影響を及ぼすようになった。そして、2015 年 12 月に発表された「人口・計画生育法（修正案）」は、2016 年 1 月 1 日から約 40 年間にわたって実施してきた「一人っ子」政策に終止符を打つものであった。

本論文では、中国の「計画生育政策」について分析しつつ、“80 後”の婚姻問題をさまざまな角度から分析し、中国の重要な社会問題のひとつとして取り上げる。世界人口のおよそ 5 分の 1 を占め、世界第 2 位の経済体として、中国の経済発展は人類社会に多

大な影響を及ぼし、また中国の社会問題はグローバル化しつつあり、“80 後”に対する研究は中国だけでなく、世界にとっても大きな意味をもつと考えているからである。

第一章 「人口と人類社会」では、人類の歴史において、人口の変化と社会発展の相関関係について分析を行う。人類の歴史において、人口の変化が社会の発展に如何なる影響を及ぼしてきたかについて概観する。本章では、中国の人口抑制政策の実施により、人口構造の変化、とくに“80 後”が受けたさまざまな影響について検討し、人口のスケールメリットにより、世界経済と科学技術、及び社会の発展が促進されるということについて検討を行う。一般的に言えば、人口の増加によって食糧の消費量も相対的に増えてくる。人類は農業を行うことで食糧の生産技術を発展させ、人口増加による食料問題を解決してくる。その後、さらに生産力を発展させるために工業革命を行い、食料の貯蓄を増やしてきた。第二次世界大戦を経て、工業技術はさらに発展し、医療技術も進歩し、世界人口の急増を招く。このように、技術の発展と人口の増加には極めて密接な関係があり、と同時に、人類社会の発展も人口増加と密接な関係があると考えられる。

第二章「中国における人口政策の変遷」の第1節では、新中国の成立から「計画生育政策」が実施されるまでの歴史的背景、および異なる時期における人口情勢について分析を行う。具体的には、1950年～1979年までの約30年間において、不均衡な経済発展と混乱した社会情勢が、中国の人口規模の変化に如何なる影響を与えたかを分析する。新中国の人口政策はまず、毛沢東が“人多好办事”（人口が多ければ国家建設に有利だ）と発言したことをきっかけに人口増加政策を実施し、70年代末の鄧小平が提唱した“只生一个好”（子どもは1人生んだほうがよい）という発言をきっかけに人口抑制政策を導入した。

第2節では「計画生育政策」の主な内容について説明し、具体的な実施方法とそれに関連する社会問題について分析を行う。たとえば、「一人っ子」を中心に実施された「計画生育政策」によって、「失独家族」という深刻な社会問題が発生したこと、また「失独親」たち悲惨な生活状況について報告する。一方、マイナスの影響として、労働力不足、超過出産に対する賞罰政策にも言及し、それによって引き起こされた人権問題について考察を行う。

第三章「“80 後”の婚姻問題」では、まず“80 後”が生まれ育った歴史的背景につい

て説明し、“80 後” の概念について説明を行う。彼らは 1979 年から実施された「計画生育政策」の影響を受けた最初の世代として、中国の伝統的な価値観を受け入れつつ、開放と自由に代表される価値観の影響を受けていることを指摘する。また、「中国第六次全国勢調査報告」と「2016 年国民経済と社会発展報告」に基づき、“80 後” の人口規模と現状について考察を行う。

次に、地域別に 80 後” の婚姻上の特徴について分析を行う。異なる地域に暮らす“80 後” の婚姻実態を把握するために、筆者は西部にある甘肅省白銀市靖遠県と中部地域の河南省洛陽市、東部の首都圏にある北京市海淀区でそれぞれ現地調査を行う。経済成長が最も著しい沿岸部である北京において、“80 後” の婚姻率は相対的に低く、晩婚化の傾向も強い。それに対し、中部地区に暮らす“80 後” の婚姻率は沿岸部に比べて高く、経済発展が比較的緩慢な西部地区に比べて低いことが分る。また、東部地区の“80 後” 出稼ぎ労働者の婚姻率は中部地区のそれに近いことも判明する。一方、2017 年に同地方で行った 2 回目の現地調査により、2011 年の結婚率が一番低かった北京市戸籍の“80 後” が、6 年後の 2017 年になると、結婚率が一番高い人口集団に変化する。中部と西部地域の“80 後” は 6 年間を経て、彼らのほとんどが結婚していたことは意外であり、また独身中の“80 後” は地域を問わず職場での昇進、およびよりよい人生を実現するために奮闘努力中で、晩婚化の傾向が強いことを明らかにする。以上の調査結果とともに、各地域における“80 後” の婚姻状況について、事例を挙げて具体的な考察を行う。

学歴と婚姻年齢との間にも一定の関係があり、筆者は高校時代のクラスメートをサンプルにし、2 度の調査を行った結果、勉学の期間が長いほど晩婚化の傾向も強いことが判明する。すなわち、高等教育を受けていない者は、高校卒業後に早い段階で就職し、社会人としての生活を送るようになり、婚姻年齢も全般的に低くなっていることが分かる。

第四章「婚姻と価値観の変化」では、“80 後” の婚姻に対する意識変化によって現れたさまざまな問題について分析を行う。社会と経済の発展により、人びとの価値観が大きく変化し、逆に人びとの価値観の変化はまた社会発展の方向に大きな影響を与えた。たとえば、ディンクス現象、“剩男・剩女（売れ残り男女）” 向けの見合い系番組、独身者とセックスフレンド、レンタルフレンド、代理見合い、金銭目当ての婚姻、および“裸婚” などの社会現象について考察する。本章では、伝統社会における婚姻と家庭に関する価値観などに注目し、社会の安定と伝統的な人間関係の維持のための家庭の役割が弱

体化している現状について分析を行う。

第2節では、“80後”の独身者の状況について考察し、具体的には2つの部分に分けて考察する。ひとつは、結婚したい男女がさまざまな理由で結婚しにくい状況にあることについて分析する。彼らが相手の経済力や学歴、家庭的背景などを過度に重視していることから、多くの人が結婚に迷っていること、またそのために“剩男・剩女”という社会現象を巻き起こしていることに注目する。たとえば、見合い系番組の流行現象について考察する。もうひとつは、独身生活を享受し、結婚したがるがとくに悩むことなく、また都市部の“80後”の間で「レンタルフレンド」や「セックスパートナー」が話題となる。平均30歳以上の独身者たちは、結婚難の問題を中心に社会から注目を集めている人口集団である。“80後”の独身者、とくに都市部に働く独身者たちは、さまざまな理由により独身生活を続けている。2011年に調査を行った746人のうち、約4分の3の回答者がセフレを持っていると答えた。婚姻状況別に見ると、既婚者441人のうち、セフレを持つ者が335人であり、既婚者の約4分の3を占めていることが明らかになる。そして、セフレを持つ“80後”独身者の共通点として、高収入で高学歴の者が多い。しかし、2回目の調査結果を見ると、北京で働く“80後”の人口構成が変わっており、また彼らのセフレに対する考えも変化し、家庭と婚姻に対する考え方に変化が現れたことを確認する。

第4節では、“80後”の独身者の見合いの実態について報告する。具体的には、若者による「見合い大会」と親たちによる「代理見合い」現象について考察する。現在の“80後”の独身者のなかには、相手の金銭的条件を過度に重要視するあまりに、なかなか結婚できない人が多い。一方、“80後”の結婚難を解決するために、若者の代わり、親世代が代わりに見合いを行い、筆者は北京市中山公園の中にある「代理見合いコーナー」において、親たちが活躍している現状を詳しく観察し、分析を行う。「見合いコーナー」で見られる「戸籍偏重」の傾向は、現在中国における地域差別の社会現象の一面を反映しており、たとえば北京に生まれた人は「京籍」と呼ばれ、自分の努力で北京戸籍を取得している地方出身者は「京戸」と呼ばれている。両者は同じように北京市基準の年金と教育、医療、交通などの社会福祉を受けているにも関わらず、後者は「生粋」の北京人から差別されている現状を明らかにする。

第5節では、“80後”の婚姻と金銭との関係について考察を行う。中国人の結婚式、とくに結婚披露宴に代表される婚姻の儀式は、結婚当事者と双方の家庭だけのための典礼ではなく、友人や知人、双方の親戚などに「個人と家庭の幸せと実力」を誇示するも

のになっている。しかし、“80後”のほとんどは社会進出して間もなく、まだ高収入が見込めない年齢層にあり、親の尽力なしでは豪華な披露宴など望めないのが現状である。またそれとは逆に、「家なし、車なし、披露宴なし、あるのは結婚証明書だけ」という状態での結婚を“裸婚”と呼び、「拝金主義」的な結婚に反対し、「金銭と車より、純愛」を信じ、恋愛感情を最優先にして結婚する人たちが増えている現状について言及する。

第五章の前半では、“80後”の離婚状況について分析を行う。中国民政部が公表した資料によると、2016年の離婚件数は約415万8,000組に達し、2006年から10年連続で離婚率が上昇している。そのうち、“80後”の離婚者数は全体の約57%を占め、約237万組あることが分かる。地域別、および民族文化や宗教などの影響によっても離婚状況は異なっている。例えば、新疆地域ではイスラム教文化の影響を強く受け、伝統的な「一夫多妻制」、および結婚年齢の低下などの原因により、2016年における離婚率は全国トップとなった。“80後”の高い離婚率の背景には、「婚外愛人」、「家庭内暴力」、「電撃結婚と離婚」、「嫁姑のゼネレーションギャップ」などがある。“80後”は仕事の圧力や複雑な人間関係に悩まされ、離婚したくてもその余力のない場合が多い。帰宅後も、嫁姑関係や収入問題、性生活の不調和などに付き纏われる。過剰なストレスを発散するために愛人を作ることも多いが、そのために払う犠牲も多い。

実は、夫婦関係に亀裂が入る要因は不倫だけでなく、むしろ亀裂が生じているから不倫に走ると言ってもよい。一方、“80後”の女性たちの経済的・社会的地位の向上により、心理的に「我慢」や「犠牲」の呪縛から解放されたことも離婚の主な原因になっている。女性たちはもはや「男性の付属品」でも「子どもを産む器械」でもない。それに加え、『婚姻法』の改正や『家庭内暴力反対法』の実施により、離婚手続きが簡素化されたことも離婚率の増加に繋がっている。一部の“80後”や“90後”は、その簡略化された婚姻・離婚手続きを利用し、いわゆる“閃婚”と“閃離婚”（電撃結婚と離婚）をするようになったのである。

都市部の“80後”は、ほとんどが兄弟姉妹のいない「一人っ子」である。わがままというイメージが強く、成長して恋愛する歳になっても相互理解に欠け、互いに譲り合わない傾向が強く、結婚後もまた家庭問題を冷静に処理できず、簡単に離婚してしまう人が多い。互いの信頼不足は離婚原因の要因のひとつであり、自分の自由を強調しながら、相手のプライバシーを無視する行為は、「自由」を強調する“80後”の矛盾点であり、わがままな一面を如実に現わしているといえる。

第2節では、「空巢老人」と「留守児童」という社会問題について考察する。およそ2億人の出稼ぎ労働人口は、中部や西部から東沿岸部の都市圏に移動し、都市部の建設と経済発展に巨大な貢献をするとともに、労働人口の流出地である農村地域では、空洞化問題が深刻になっている。調査した村では、人口のほとんどが「空巢老人」である高齢者と「留守児童」の未成年である。彼らはさまざまな問題に直面し、とくに高齢者の介護問題と未成年の教育問題が一番深刻である。また、「留守児童」たちは大切な幼少期を悲惨な現実に奪われ、長期にわたる両親離れの生活より受ける心理的な被害も計り知れないと感じる。

第五章の後半では、1979年から続けてきた人口抑制策は転換を迎え、「一人っ子」政策がついに撤廃されたこと、また2016年1月からすべての夫婦は子どもを2人まで出産できる「二児政策」が実施されたことについて述べる。「二児政策」に対し、中国の人口学界や社会学界で“80後”の子どもの出産にとって必ず積極的な影響を及ぼすと予想していたものの、大きく外れてしまったのが現状である。たとえば、不妊症の脅威や高騰する物価、子どもの養育費、両親の老後問題など、“80後”が直面する問題は多く、38年間にわたって人口抑制を厳しく行った後の政策の緩和が、“80後”を含む若い世代たちの生育願望と中国の人口増加にどのような影響を及ぼすかについて分析する。筆者は調査した事例を用いて、「二児政策」の実施が“80後”の親の出産に対してほとんど影響していない現状について説明する。

第六章「男女比不均衡と女性輸入」では、統計調査に基づき、1979年から実施されてきた「計画生育政策」は現在の“80後”、“90後”世代、及び全人口の性比不均衡を招いた主な原因であると指摘する。中国には古くから「男尊女卑」と「男児選好」の思想があり、とくに農村地域ではいまでも根強く残されている。そのため、法律と政策の裏を狙った新生児の性別検査、および妊娠人工中絶が盛んで行われてくる。また近年では、ネットショッピングサイトでも性別を鑑定する「携帯式超音波検査機」が公に販売されており、問題視されている。

第2節では現地調査に基づき、嫁不足の問題が深刻化している農村地域、たとえば北朝鮮とベトナムと国境を接している辺境地域では、人身売買などの違法手段で女性を「輸入」している現状について考察を行う。北朝鮮は中国の隣国であるが、依然として鎖国に近い状態にあり、人びとの移動が自由でないのが現状である。そのため、中朝の

国境を越えるには人身売買を目的とした仲介業者に頼るほかない。一方、ベトナムは開国政策をとっており、筆者は2回の現地調査により、ベトナムに近い中越国境地帯における人身売買の実態を究明する。さらに、売り飛ばされた女性に対する聞き取り調査により、彼女たちの生活の現状および人身売買に関する裏事情を知ることができた。たとえば中国とベトナムでは、両国の警察署のような公的な機関においてさえ腐敗と汚職が蔓延し、人身売買犯罪者や売春宿の経営者と金銭的な利益関係を結び、共犯者になっている現状の一部を明らかにする。